

## 第 66 回神奈川建築コンクール 住宅部門最優秀作品選評

### 「CHIGASAKI HOUSE」

審査委員：古賀 紀江

本年度は「CHIGASAKI HOUSE」という 118.35 m<sup>2</sup>の敷地に建つ 112.64 m<sup>2</sup>の戸建て住宅が最優秀賞に選出された。神奈川県、いや日本国中どこにでもありそうな袋小路状の私道を挟んで戸建て住宅が並ぶ場所に建つ、「二代目」住宅だ。ある一家の子供が長じて自分の家族を作り、再び実家の家族と共に暮らす家である。核家族一家は三世代 6 人の大家族となった。敷地は狭く、家族は増えた。建築家は何をしたか。

この建築家は、見慣れた nLDK 型という日本の住まいの形は核家族を想定して作られているので、この一家のような「新しい家族」の家には不向きと考えていくつかの工夫を行った。まず、個室は規模を 2.5 畳から 4 畳程度の最小限に抑えて各自の空間を確保した。一方、皆で共有する空間は大きくして個人の行為も包括した。これら個と共有の空間を南北に往来するスキップフロアが全体化している。半地下の個室群階から光と風に溢れた吹き抜けの台所、食堂等の共用空間を経て 2.5 階の個室群階に至る展開は、建築家の言葉によれば家族が「バラバラでありながらも同時に居る」ことを可能にする。半地下・スキップフロア・2.5 階は、周囲の家々への圧迫感の軽減にも一役買っているようで、狭小敷地で家を建て替える一つの手法にも見える。小さな屋上デッキに上がると、缶ビールを置くのに丁度良いカウンターがある。そこに茅ヶ崎の花火を眺める「新しい家族」が集う。

雑駁な説明であるが、nDK という住まいの形は第二次世界大戦後の住宅不足解決の施策である公営住宅供給の設計に原型がある（nLDK は後にリビングルームの概念が付加されたもの）。それは当時の核家族化が進む社会で人々のニーズに最大限応えようとした住宅であった。しかし、本作品家族の「物語」に見るように少子高齢社会化が進む今日、家族のかたちの多様化は必然である。そこに内在するニーズに応えることができる住まいが求められる。本作品はこの要請に応え得る普遍的な計画としても評価された。